シリーズ「共に成長する」③互いに優先し合う　　マルコ 9:33～37

本日のテーマは「共に成長する」の第 3 回“互いに優先し合う”ということです。神様は私たちを自分自身の枠を超えて他の人々のために生きる者として造られました。またそのように生きないと自分自身この世に存在している意味も分かりません。人生はあなたが中心ではありません。主イエスによれば、キリストのいのちを体験したいと願うならば、自分ではなく相手を優先しなければならないことが教えられています。「いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見い出すのです」マタイ 16:25

他の人を優先させるとは、キリストのからだ、つまり教会全体の最善を考えて自分自身を犠牲にすることとも言えます。しかしそれは人に譲ったり、自分があきらめたりすることではありません。聖書はさらに人を優先させ、自分自身はあえて裏方に回るようにも勧めています。“兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。"　ローマ 12：10 ここは別訳では「心を込めて愛する者となり、自分は脇役に徹しなさい」とされています。

私たちは誰しも成長することを願っています。キリストの良き弟子でありたいと願います。そのためにキリストは私たちが互いに優先し合い、裏方に回るようにと勧められています。今日取り上げた弟子たちの気持ちもやはり良い弟子、立派な弟子になりたいというものだったと思います。しかしながら結果的には誰が一番偉いかということで大喧嘩となったのです。この争いは主イエスが十字架におかかりになるギリギリの時まで続きます。何がおかしかったのでしょうか？　何がずれていたのでしょうか？　そこに焦点を当てながら見てゆきたいと思います。

主イエス・キリストは、ある時、十二人の弟子たちを呼び寄せて、「だれでも人の先に立ちたいと思うなら、みなのしんがりとなり、みなに仕える者となりなさい。」マルコ 9:35 とおっしゃいました。この教えが語られるに至った事情が 33 節以下に語られています。それは、弟子たちが「だれが一番偉いか」と議論していたということです。そういう議論が起るということは、彼らの中に「人よりも偉くなりたい」「一番先になりたい」という思いがあったということです。弟子たちがそういう思いを持っていることを知った主イエスが、「だれでも人の先に立ちたいと思うなら、みなのしんがりとなりなさい」とおっしゃって、「しんがり、つまり後になることの幸い」をお教えになったのです。 人よりも後になることは何故幸いなのでしょうか。様々なスポーツにおいては、みんなが勝利を目指して頑張ります。みんなが人よりも後になろうとしたら競技は成り立ちません。一等を目指して頑張るわけですが最初からビリになることを目標に頑張る人はいません。ですからあくどいことやズルをしない限り、努力して自分を強くし、高めていこうとすることは良いことであり必要なことです。 人に譲って自分は何もしないことが良いことであると教えているのではありません。

また、主イエスのこのお言葉を、仕えることの大事さを教えている言葉として理解されるかもしれません。すべての人の後になることと並んで、すべての人に仕える者になることが勧められています。つまり「後になる」というのは「仕える者になる」ことなのです。だから、誰よりも謙遜に身を低くして、人に仕える者となること、私利私欲を捨てて、世のため人のために尽くす人になること、そのために人よりも後になり、損をすることになっても、なお人に仕える道を歩んでいくこと、そういう奉仕の精神の大切さを主イエスは教えておられるのだと理解されるかもしれません。ただこのみ言葉をそのように読むことによって陥る落とし穴があります。それは、そのように謙遜に人に仕えている人こそが、本当の意味で一番先の、一番偉い人なのだ、という思いがそこに生まれてくることです。謙遜に仕えることにおいて人よりも先になろうとするということが起るのです。謙遜の度合いコンテストみたいなものですね。

仕事柄、いろんな人の話を聞かせていただきますがなかなか人間関係は難しいですね。「私はダメな人間なんです。」「私ほど罪深い人間はいないんです」といったことを時々言われる方に対して、「そんなこ

とありません。」と言うと「私のことをあまり分かっていないのにそんなに簡単に『そんなことはありません』なんて言わないでください。さらに「先生は偽善者だ」とか「口先だけだ」と怒られたこともあります。だからと言って「私はダメな人間です」と言われて「そうですね。ダメな人ですね」なんて言うとますます落ち込んだり、怒ったりされますね。人の謙遜さを推し量るのは難しいと思います。おそらく弟子たちが議論していたのは「誰が一番偉いか」それは、誰が一番身分が高いかとか、誰が一番金持ちか、というような話ではありません。彼らは、誰が一番イエス様にしっかりと仕えているか、弟子としての務めを最も忠実に果たしているのは誰か、ということを競い合っていたのだと思うのです。彼らは、主イエス・キリストに仕えることにおいて、一番先になろうとしていたのです。それと同じようなことは教会においてもしばしば起ります。教会では、自分の意見ばかりを主張してそれに固執し、人を自分に従わせようとするようなタイプの人はあまり好まれません。むしろ身を低くして神様と隣人とに仕えていくような人が尊敬されます。しかしそこにはともすれば、自分はいかに謙遜に奉仕をしているか、ということにおいて人よりも先になろうとする、という競い合いが起りがちです。

主イエスは「だれでも人の先に立ちたいと思うなら、みなのしんがりとなり、みなに仕える者となりなさい。」と言われました。この教えによって主イエスは何を語ろうとしておられるのでしょうか。主イエスはこのみ言葉によって、そもそも人よりも先になろうとすること自体をやめなさいと言っておられるのです。つまりこの教えは、日本の諺にある「実るほど、頭（こうべ）を垂れる稲穂かな」というような、処世訓の一つとしての「謙遜の勧め」とは違うのです。

主イエスの教えが処世訓とは違うことは、３６節以下の教えによってさらにはっきりします。主イエスは一人の子供の手を取ってかれらの真ん中に立たせ、その子を抱き上げて、「だれでも、このような幼子たちのひとりを、わたしの名のゆえに受け入れるならば、わたしを受け入れるのです。」とおっしゃったのです。ここに語られているのは「子供のように素直で純真な者になりなさい」という教えではありません。ここでの教えは「このような子供の一人を受け入れなさい」ということです。子供を受け入れる、それは子供を可愛がり、大事にすることとは違います。この場合の「子供」とは、大人たちから排除され、邪魔者とされている者です。「子供の出る幕ではない」「子供はひっこんでいろ」と言われている子供です。当時子供は、女性もそうでしたが、社会において数に入れられず、一人前の人間とは見なされていませんでした。主イエスはそのように低く見られ、まともに相手にされていない人々の代表として、一人の子供を真ん中に立たせ、抱き上げて、この子供のように低く見られている人を受け入れることを求めておられるのです。受け入れるとは、その人を共に生きる仲間として認め、その人と共に歩むことです。低く見られ、相手にされないような人々を仲間として迎え入れ、共に歩むことこそが、「このような子供の一人を受け入れる」ことなのです。ですから「私は子供が好きで、可愛いと思っているから子供を受け入れている」と思ったらそれは大きな間違いです。自分が可愛いと思い、いとおしいと思う人を受け入れることはたやすいことです。主イエスがここで教えておられるのはむしろ、可愛いとは思えない者、いとおしくない、共にいたくないと思うような者を「わたしの名のために」受け入れることなのです。そのことこそが、「すべての人の後になり、すべての人に仕える者となる」ことの具体的な実践なのです。それゆえこの教えは、謙遜に人に仕える方が結局人々の尊敬を得ることができ、結果的に一番先になれる、というような処世訓とは違うのです。処世訓は私たちがこの世を上手に生きていくための知恵です。しかしこの教えは、この世を上手に生きていくことをやめなさいと言っているのです。

主イエスの周りにはいつも子供たちが群れ集まっていました。主イエスは子供たちを喜んで迎え、受け入れ、祝福しておられたのです。その光景は騒がしく、ざわざわしていたでしょう。しかし主イエスは、そういう騒がしさや、秩序、規律が整っていない様子を喜んで受け入れておられました。もっと静粛に、厳粛に私の話を聞け、などとはおっしゃらなかったのです。人を受け入れるというのは、そういうなごや

かさに生きることによってこそ出来ることです。どちらがより謙遜であるかと人と競い合ったり、どちらの奉仕がより優れているかと比べ合って一喜一憂し、人に対して苦い思いを抱いたりすることというのは、なごやかさとはかけ離れたことです。神様に仕えている者同士が集まるとピリピリしているというのは不自然です。そして神の国、天国というのは、子供たちの声に満ちている、明るくなごやかな、賑やかな所です。反対に地獄というのは、冷たい、厳粛な、静寂が支配している所なのではないでしょうか。詩篇８篇１、２節に「あなたのご威光は天でたたえられています。あなたは幼子と乳飲み子たちの口によって、力を打ち建てられました。」。とあります。神様は、幼子、乳飲み子の口によってほめたたえられることをこそ喜ばれる方なのです。その神様のみもとである天国は、子供たちの賛美の声が満ちている、なごやかな所なのです。

人を迎え入れ受け入れるなごやかさに生きることこそが、後になること、人に仕える者となることの基本であることを、主イエスは身をもって示し、教えて下さいました。それに続く３７節にはこのように語られています。「だれでも、このような幼子たちのひとりを、わたしの名のゆえに受け入れるならば、わたしを受け入れるのです。また、だれでも、わたしを受け入れるならば、わたしを受け入れるのではなく、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。」。このみ言葉は何を語っているのでしょうか。低く見られ、相手にされないような、共に歩みたくないと思うような人々を受け入れる、その時、実はその人々の中に主イエスがおられるのだ、主イエスがそういう人々を通して私たちと出会っておられるのだ、だからその人々を受け入れることこそ、主イエスを、そして神様を受け入れることなのだ、というふうにこのみ言葉を読むことはできます。さらに「わたしの名のゆえに受け入れる」ということは主イエスのなしてくださった救いのみ業のゆえにということです。私のためになされた救いのみ業とは何でしょうか？　それは主イエスが私の罪を全て背負って十字架にかかって死んで下さったことによって神様が私たちの罪を赦して下さったこと、さらに主イエスの復活によって新しい命の約束を与えて下さっていることです。主イエスと父なる神様が、受け入れられるに値しない弱く貧しい罪人である自分を愛と恵みをもって受け入れて下さった、その救いの恵みに感謝することが受け入れ難いと思われる人を受け入れることにつながってゆくのです。

他の人を優先させることは果てしの無い難題です。ですから私たちはキリストの力により頼み、キリストの力を得なければなりません。パウロは“キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい”エペソ 5:21 とヒントを与えてくれています。相手を優先させる力を得る鍵は、私たちの心がけや意志力ではなくキリストを敬うことにあるのです。

主イエス・キリストがこのように私たちを受け入れ、罪を赦し、共に歩んで下さっている、その恵みを見つめるなら、誰が一番偉いかといがみ合い、主イエスと隣人とに仕えることにおいてすら人よりも先になろうとする弟子たちの、また私たちの姿はなんと醜いものでしょうか。主イエスの救いにあずかり、その弟子として生きる私たちに求められているのは、主イエスのみ名のために、お互いを受け入れ合うことです。主イエスが十字架の死によって私たちを受け入れて下さったのだから、しかもその恵みを、一人の子供をやさしく抱き上げて祝福することによって示して下さったのだから、私たちも、そういう優しさ、なごやかさの中で、お互いを受け入れ合い、愛し合って生きたいのです。「みなのしんがりとなり、みなに仕える者となりなさい。」とはそういうことです。そこにこそ、本当の幸いがあります。また、人間としての本当の尊厳もそこにこそ生まれるのです。

人間の本当の栄光、尊厳は、私たちが偉くなり、立派になり、人よりも先になることによって得られるのではなくて、優しさとなごやかさの中で、お互いに受け入れ合い、共に生きていくところにこそ与えられるのです。主イエスはそのような歩みへと私たちを招いておられるのです。